

時津風(ときつかぜ)

その季節や時季にふさわしい風のことを「時津風」といいます。

「四海波静かにて、国も治まる 時つ風：」

ご存じの謡曲・高砂にある一文です。「時津海」という名も耳にする言葉です。

そういえば、相撲部屋の「時津風」、しこ名「時津海(ときつつみ)」は本来、順風を表し響きもよく人々に好まれる縁起のよい名のようにです。

さて、10月「神無月」。神話に始まるわが国土は、開発に傷つきながらも、今、経済繁栄を誇っています。このところ国情は荒れ気味です。

風雲急を告げ、政局もどうか秋風の寂しさを漂わせ、華のない「色なき風」が吹いているようにも思われます。

秋の山を彩る紅葉は、鮮明であればあるほど周囲との調和が難しく、時として見る人を疲れさせることもあります。色なき風の国は、いわば癒やし系で順風と考えるのは浅薄(せんぱく)なのででしょうか。

「森を歩

き、草地に

シートを広

げ、木漏れ日の中で弁当を食べている。おしゃべりをし、

寝転がって空を眺め、本を読み、しばしまどろむ。」想像するだけで、いかにも爽快(そうかい)でリラックスできそうです。

庭の柿も、いよいよ色づき始めました。何となく眺めていたら、ヒヨドリだらうか鳥が一羽枝にとまり、器用に実をつついていきます。

柿はすべてをとらず、少しの実を残すのが古くからの教えだとか。「鳥のため」とも言うようですが、来年もたくさんの実をつけてくれるようにとの柿の木への感謝と祈りが込められているようです。木(き)守(まも)り(もり)か木(き)守(まも)り(もり)柿(かき)とかいいます。

いかにも日本的で美しい言葉です。自然への敬意と人のつつしみが似合う10月「神無月」です。



色づく柿の実

指宿市長 豊留悦男